

はなくらべしきのことぶき まんごい さぎむすめ
花競四季寿 万歳 鷺娘

〔解説〕

「花競四季寿」は、文化六（一八〇九）年、大坂御霊神社の芝居にて初演された景事。題名に表される通り、春夏秋冬の構成となっています。春の「萬歳」では正月の門付け芸の賑やかな様子、夏の「海女」は海辺で若い海女がつかない男を思う様、秋の「関寺小町」は百歳の老婆となった小野小町が、華やかなりし往時をしのぶ、侘びしい秋の景を表し、冬の「鷺娘」では、雪景色の中、鷺の精が春を待つ心で楽しげに舞う様を描きます。

萬歳とは、新年に家々を訪れて祝言を述べ、舞を演じる門付け芸及びその芸人のこと。烏帽子に大紋の直垂または素襖姿で扇を持った太夫と、大黒頭巾にたっつけ姿で鼓を持つ才蔵の二人一組で演じました。太夫と才蔵が新年を祝し、鼓を打ちながらにぎやかに町を行く様を描いた、おめでたい演目です。また、「鷺娘」も、長唄の「鷺娘」とは異なり、明るい内容となっているのが特徴です。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

万歳

先づ初春のあしたには、門に松立て、寿を祝ふ熨斗目やのし昆布、千代とゆづり葉あざやかに、告げて行くらん鶯の、声ものどけき春の空。実に九重の賑々と、いつまで尽きぬ竹本の、その一節の世をこめて、幾万歳と祝ひける。

徳若に御万歳と御代も栄へまします。愛敬ありける新玉の、年立ち返るあしたより、水も若やぎ木の芽も咲き栄へけるは、誠に目出たふ候ひける。京の司は関白殿、おりいの御門、日の本内裏、王は十善神は九善。万安々うらやすが木の本に、正月三日寅の一天に誕生まします若戎。商ひ神と祝はれ給ふ。商ひ繁昌と守らせ給ふは誠に目出度ふ候ひける。八瀬女人瀬女、京の町のやしよめ、売つたる物は何々。大鯛小鯛、鰯の大魚、鮑さゞひ、蛤子蛤子、蛤々、蛤見さひなど売つたる物はやしよめ。そこを打ちすぎ側の棚見たれば、金欄緞子、緋紗綾緋縮緬、縺子緋縺子縺縺子縺珍。色々結構に飾り立てゝ候ひしが、町々の小娘やお年の寄りし姥達まで、売り買ふ有様は、実にも納まる御代なれ時なれ。恵方の御蔵にずっしりく、ずっしりくずし、宝も納まる。門には門松、背戸には背戸松。そつちもこつちも幾年の御祝ひと、御代ぞ目出たき。

鷺娘

しのぶ山、口説の種の恋風が吹けども傘に雪もって積る思ひはなほも幾重か重なる思ひ。ちらす外山の雪をくゆらす炭竈に冬籠りせし一枝を、春待ち顔に初花の咲きかけんとやちらく、梢に宿る白鷺が霜毛をぬいで羽たゞきの、雪は花より花多き六つの花びらちらりく、袂かざしてしをらしや。白雪のくはらへどく降り積る、花と見紛ふ雪や氷を見ながらも、袖をかざして立寄れば、それは木々の花、切りくべて樂しまん、酒にいざやあそぶらん。四季目前にありがたや、雨土恵みの、青人草の、雨土恵みの青人草の、尽きせぬながめぞ、楽しけれ。